

3 農 耕

ヤノマムたちはいったい、いつ頃から、農耕という生産を行ない始めたかは定かでないが、現在のように1カ所に定着し、そこで焼畑を営むというやり方を始めたのは、ごく最近(約15年前)のことであるらしい。

以前、つまり農作物の植付けの時期をずらし年間通して作物が穫れるようになる前にも、ヤノマムたちは焼畑を行っていた。しかし、それは現在のような輪作の形はとっておらず、畑に作物がなくなれば、ジャングルに採集に出かけていき、次ぎに収穫できるまでしのいでいたということである。以前の農作物は、バナナとマンジョーカ(キャッサバ)ぐらいのものであったが、いまでは10数種のものを栽培している。

狩がヤノマムの男たちにとって誇りある生業であるとすれば、農耕は実質的に彼らの生命を支える生産であり、いまや最も多くを、この生産形態に依存している。

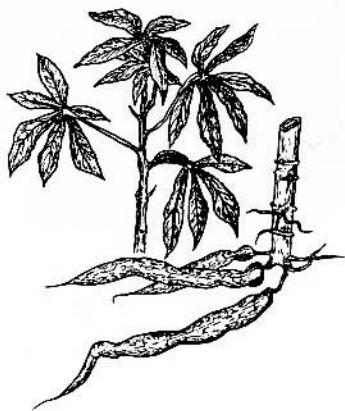
<各部落の農耕のさま>

シリアナ族ロベルト部落に入の手前—— 約200m~300mから、ジャングルが開け、広大な農耕地が姿を見せる。畑の中には数本の細い道が不規則に走り、いち度畑の中に立ち入ってしまったらバナナやサトウキビなど背の高い作物で方向が確認できなくなってしまうぐらいである。このロベルト部落の場合、広大な畑は、それぞれ部落の者たちの所有地として分割されて、決まっており、20余りに分かれている。分割されているといっても境界線や目印などは

なく、その植付品種によって区別している。例えば、アントニオ(シャーマン)の場合でいうと、彼は広大な畑を所有しているが、他者所有のバナナ畑に隣接する場所には決してバナナを植えず、他の品種を植えて、他者と自分の畑を区別している。

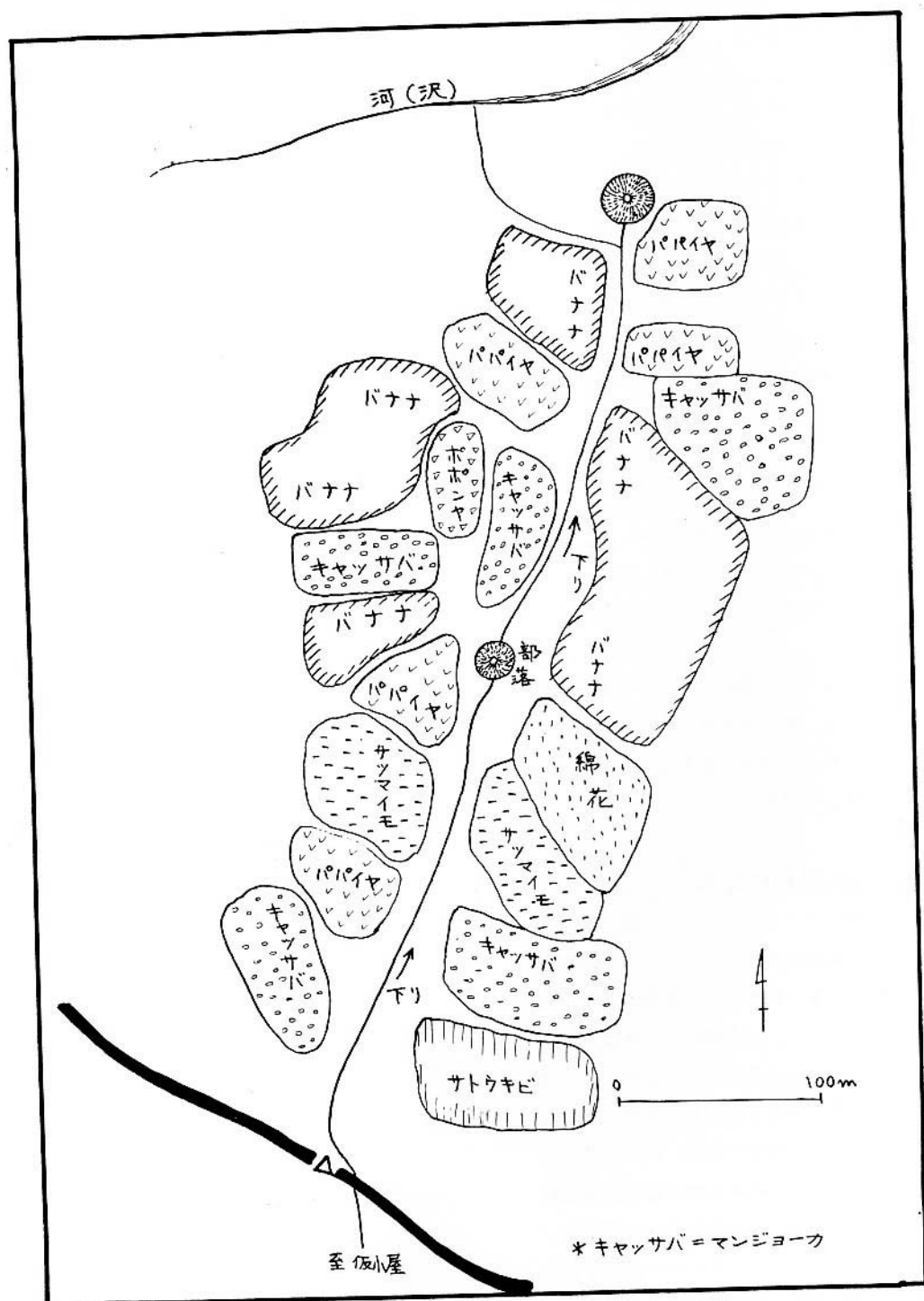
ロベルト部落の全耕地面積は約600haという大きいものだが、同じシリアナ族のブリニョ部落の農耕地はもっと広いということである。(残念ながら、畑の面積を確認できずに終わった。)

今回、最後に訪れたパラフリ族においては山腹に農地を持っており、これも焼畑農耕の形態ではあるが、未発達のものといえよう。すなわち、彼らは、この農地をすてて、他の地へ移動中であって、焼畑移動農耕の形を示しているものと思える。なお、植付作物はロベルト部落のそれとほとんど変わらない。



マン
ジ
ョ
ー
カ

◇ パラフリ族トメ部落農地図





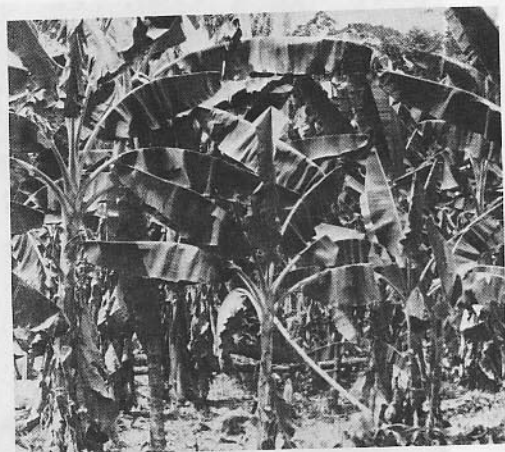
さとうきび畑で。(シリアナ族ロベルト部落)

<農耕サイクル>

1つの部落の農地はいくつかに分割されており、各々に所有者がいることはすでに記したが農地図を見てもわかるように、1人が2～3カ所の農地を持っている場合が多い。これは耕作物が1年中収穫できるように考えたものである。つまり気候の年変化の少ないこの地域においては、一定の期間をおいて作物を植えつけると、2～3年目からは1年中その作物が収穫できることになる。彼らはこのことを利用し、1人で2～3カ所の畑を持っているのである。

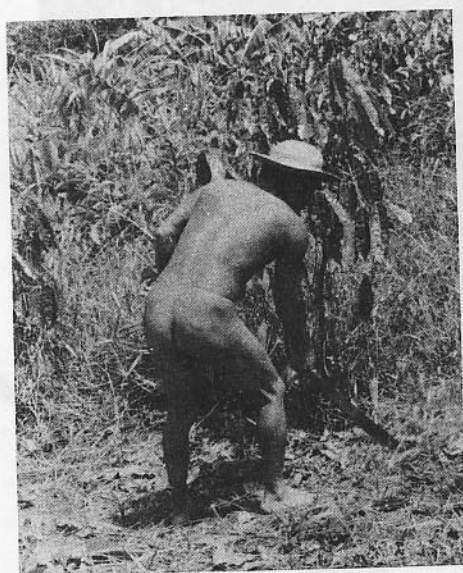
このような方法で栽培しているのは、おもに主食となるバナナ、マンジョーカ（キャッサバ）であり、その他のイモ類やサトウキビ、果物類などは特別このような植付方法はとっていない。

主要食物の植付け時期、収穫までのサイクルを表にしてみると右記のごとくである。



◇各作物収穫期表①

品 種	植付期	収穫までの期間	収穫可能期
バナナ	常時可	8～10カ月	2カ月
マンジョーカ	〃	8～10カ月	常時
カライモ	〃	5～7カ月	〃
ホコモ	〃	5～7カ月	〃
サトウキビ	〃	5～6カ月	〃
綿花	〃	4～6カ月	1カ月
＊カライモ（さといも）、ホコモ（さつまいも）、マンジョーカ（キャッサバ）			



イモを畑る男。手に持っているのがテルサード（山刀）である。

つまり、バナナを例にとれば、植付けから収穫までの期間が約8カ月とすると、第1回目に植えたバナナが最初に収穫できるのは8カ月後である。そして第1回目のバナナを最後に収穫できるのは10カ月後である。そしてこのバナナの食べられる期間が約2カ月あるので、8カ月後から12カ月後までバナナには困らないということになる。そして、第2回目を第1回目よりも4カ月あとに植え付けたとすると、この

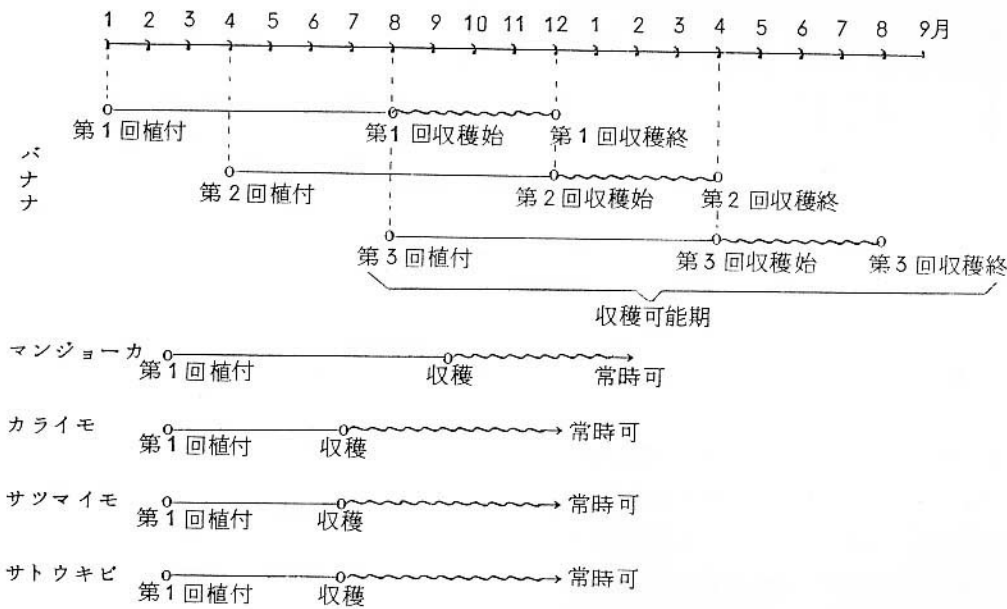
第2回目のものが収穫できるのが、
ちょうど1回目の収穫が終わる時期
なのである。

このように4カ月毎にずらして
違った土地に3回植え付ければ、
バナナは1年中とれるという計算
になる。彼らはこのようにして、
主食であるバナナを1年中絶やさ
ぬようにしている。



マンジョーカ畑。手前の空地は最近、焼いたもの。

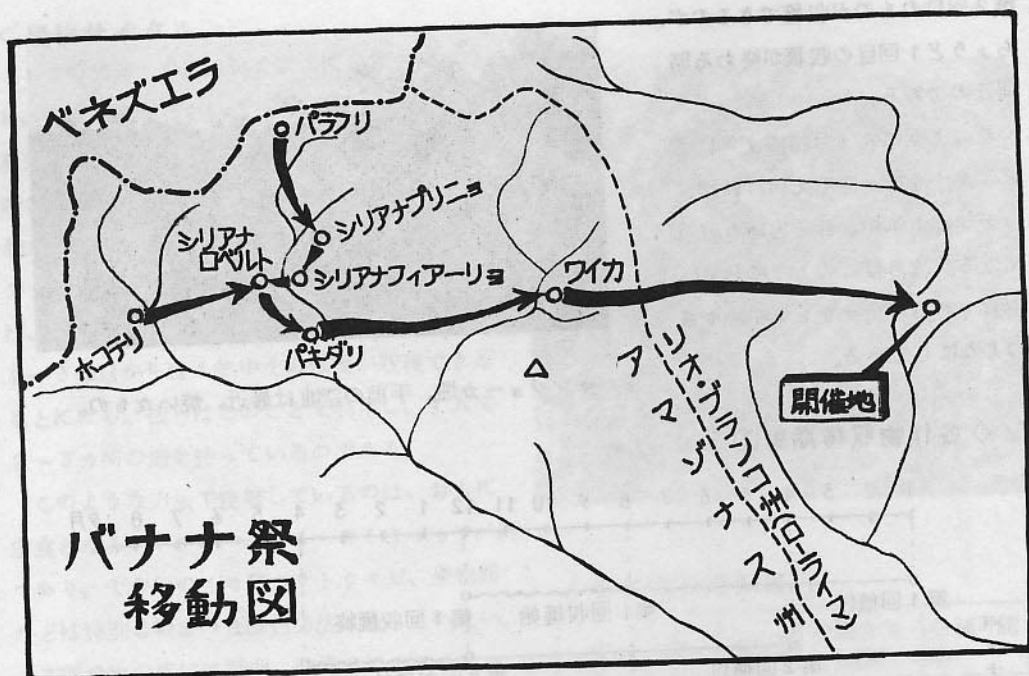
◇ 各作物収穫期表②



(収穫祭について)

バナナにふれたついでに、バナナやボボンヤ
の収穫祭について少しわかったことを書いてお
く。バナナやボボンヤが大量に収穫されると、
各部落で盛大な祭りが行なわれる。我われが滞
在中、カトリマニ(ブランコ河)の部落でバナ
ナの祭りが行なわれるために、ベネズエラのボ
ッカラフリムテリとデミニ河のホコテリの各部
落から5人くらいずつがシリアナ族ロベルト部

落に集まって来た。そして1日休息をして翌日
にはまた、歩いてカトリマニに向かっていった。
ロベルト部落からも10人ほどが同地に向かっ
た。こうして各地から数100人ものインディ
オたちが集合するのだ。このシリアナ・ロベル
ト部落からカトリマニまでは約1週間の道のり
だと話してくれた。男子は1日におそらく50km
は歩くであろう。なお、このあたりでは、収穫
祭はバナナとボボンヤだけである。



＜農作業＞

ヤノママたちは、それぞれ自分たちの畑を個別に農作業する。むろん最初の段階、つまり、ジャングルを焼き払い、新たに畑をつくる焼畑の作業も、部落あげて行なうなどということはない。農作業は一般的に親族単位で行なわれるが、実際には、女性がほとんど行なっている。ただ、植付け、開墾などの際には男性が行ない、植付けのときは、その畑の所有代表者（親族の中心的人物）が主として指揮をとる。

焼畑　　まず農耕地となるべき森林を伐採・開墾する。これには山刀や斧(FUNA Iやミッションが搬入)を使用する。この伐木から火入れまではおよそ4～6週間を要す。原則的には単独の親族で行なわれるようであるが、たいていは2～3の親族が共同してこの作業を行

なりという。

シリアナ族ロベルト部落の場合、ふつう1次伐採で終わり、火付けから整地までおよそ1週間の間隔を持たせている。整地がすめば植付けであるが、整地作業からあとの作業は女性の労働となっているのが特徴である。

植付け バナナについては株分けで行ない、サトウキビ・マンジョーカについては、さし木、種苗の植付けなどによって行なう。この際の農具は粗末な棒か山刀程度のもので、特別な農具としては別れない。

収穫 女性が団体で行動するのがつねである。この場合も親族単位の行動となる。例えば、サトウキビを収穫に行った場合をあげると高さ70 cmほど口径50～60 cm位のバスケットを背負い5～6名のパーティーを組んで畑に

出かけていく。収穫を終えた彼女らはまた同じようにパーティーを組んだまま部落に帰ってくる。このサトウキビの収穫の際、彼女らは収穫した3分の1のものを畑の中で食べてしまった。ここでおもしろいことは、ある親族の所有する畑において、同行した他の親族の1人の女性はそこでの収穫物には全く手をつけなかった。

サトウキビなどはだいたい40～50cmほどに切って、バスケットに満載して帰る。バナナは2～3房(約10～30本)ぐらいの量を1度に収穫する。その他イモ類についてはバスケットの半分ぐらいが普通の収穫量である。ただ収穫も、1人分や2人分の少量となると、品種に関係なく男女の区別なく、また個人、パーティーの別なく気ままに収穫を行なう。ただ、祭りなどが開かれるおり、多量に食物が必要とされる場合は男性が畑にくり出る。主として、力仕事は男性が行なうという具合になっている。

＜農地と親族集団＞

シリアナ族ロベルト部落の農地地図(図参照)でわかるように、首長のロベルト、副首長(シャーマン)のアントニオの所有する農地は他の者より格段に広いものである。このロベルトの部落の場合に限らず、パキダリ族ジュゼ部落、シリアナ族フィアーリヨ部落でも部落内部での地位と畑の広さとは、ほぼ比例しているようである。

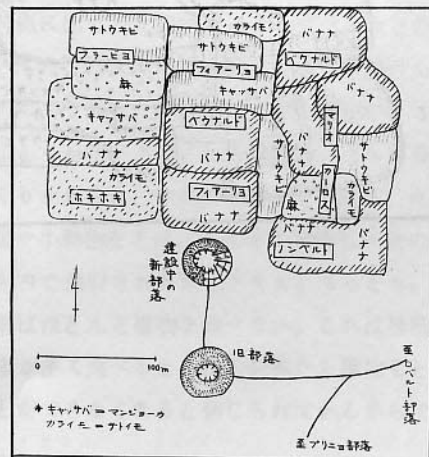
部落は、いくつかの親族集団で構成されており、その集団の中心的人物が、やはり部落内でも発言力をもつ。加えて、農作業は親族単位で行なわれ、それらに多くの人員を動員できるものが、農地の面積が広がるのは当然である。ヤノマム族においては、結婚する男性が女性のところにくる妻方居住も見うけられるが、この

バラフリにて



場合、他部落からきた若者(ムコ)についてはその来た部落において畑はないわけである。すなわち彼は妻方の親族によって面倒をみられるということである。もちろんその場合、その若者は妻方の親族の耕作の手伝いをするということになる。つまり、部落の中心者というのは、それだけ親族が多く、農耕地が大きいというの

◇ シリアナ族フィアーリヨ部落農地図



はそれなりの必要性があり、また必然的なこと
なのである。

このほか、シリアナ、バキダリ族に共通していることは、よく働く者には、権力、地位とそれほど関係なく広い農地を所有している場合が

◇シリアナ族ロベルト部落農地図

